

アラン著「幸福論」岩波文庫、岩波書店 1998 年 1 月 16 日刊を読む

ピンを取り除こう—名馬ブケファラス—

1. (1) 幼な子が泣いてどうにも泣きやまない時、乳母はしばしば、その子の幼い性格について、好き嫌いについてまことにうまい想定をあれこれとするものだ。
(2) これは親から受け継いだものだから、と言って、すでにその子のなかに父親の姿をみとめるのだ。こうした心理学的詮索が続いて最後によりやく乳母は、**すべてのことが生まれたほんとうの原因**、つまり、**ピン**を見つけるのである。
2. (1) 名馬ブケファラスが若いアレクサンドロス(紀元前 356 ~ 323。マケドニア王アレクサンドロス 3 世)に贈られた時、どんな名人もこの荒馬を手なずけることができなかった。
(2) 凡俗な者だったら、あきらめて「まったく性の悪い馬だ」とでも言っただろう。ところが、アレクサンドロスは**ピン**をさがし、^{たち}たちまち見つけた。
(3) ブケファラスは自分の影にひどく怯えているのがわかった。恐怖で飛び上がると影も跳ねるので際限がないのだ。
(4) アレクサンドロスは馬の鼻を太陽に向けた。この方向で支えると、馬は落ち着き疲れを示した。こうして、このアリストテレスの教え子はすでに、**ほんとうの原因**を知らないかぎり、**情念を癒すことができないの**を知っていた。
3. (1) 多くの者が恐怖を、ことばでもってやっつけている。しかも強い論拠をもって。
(2) ところが、恐怖を感じている者はその理由など聞かないのだ。彼は心臓の鼓動と血液の波打つ音しか聞かない。もの知りぶる者は危険を感じるから恐怖が生まれるのだと言う。情念に囚われた者は恐怖を感じるから危険だと判断するのであると言う。
(3) 二人とも自分の考えが正しいと主張するが、二人ともまちがっている。しかも、もの知りぶる者は二度もまちがいを犯している。
(4) ^{わけ}ほんとうの理由を知らないのと、もう一方の誤りがわからないのである。人間は恐怖を感じると具体的な危険を考え出して、この恐怖がリアルなもので、十分確かめられたものだと言明する。
(5) ところが、どんな小さな驚きでさえも人をおびえさせる。まったく危険などないものでも。たとえば、非常に近くで不意にピストルの一発があった時、あるいは思いがけない人が現われただけでも。マッセナ元帥(1758 ~ 1817。フランスの軍人)は暗い階段の彫像におびえて、一目散に逃げ出した。

4. (1)人がいらだったり不機嫌だったりするのは、よく長時間立たされていたせいによることがある。
- (2)そんな不機嫌にはつきあわないで、椅子を出してやりたまえ。**ものごとはどういう態度でやるかがすべてだ**、と言った外交官タレランは、自分の思いもかけなかったほど深い意味を言っている。
- (3)他人に不快な思いをあたえまいとして、彼は**ピン**をさがし、ついに見つけたのである。
- (4)現代の外交官たちはみんな、彼らのおむつの中に刺しそこねた**ピン**を持っている。
- (5)そこからヨーロッパの紛争が出てくる。一人が泣くと他の子たちも泣き出すことはよく知られている。さらにまずいことには、泣き出せばもっと泣けてくる。
- (6)乳母たちは職業的な動作で、子どもを腹ばいにさせる。するとすぐに、ちがう動きが生まれて、あり方もちがってくる。これこそ一つの説得術で、けっして高いところをねらったものではない。
- (7)1914 年の不幸(第一次世界大戦)は、思うに、要人たちがみんな、不意打ちをくらったことから生まれたのだ。
- (8)そこから彼らは怖がってしまった。人間が怖がると、怒りは遠からず起こる。興奮すると、すぐにいらだつ。
- (9)自由にすごしている時から、休息している時から、突然よびもどされるのは好ましい状況ではない。
- (10)そういう時はよく気分が変わる。変わりすぎる。寝ていて不意に起こされた時のように、目が覚めすぎてしまうのだ。でも、人間というのは意地悪なものだ、と言ってはだめた。
- (11)彼がこれこれの性格を持つ、と言ってはだめた。**ピン**をさがしたまえ。

P.9 ~ 11

[コメント]

フランスの哲学者、思想家で高等学校、リセーの哲学教師アランの「幸福論」。一人ひとりの人生や国家に立ちふさがる「ピン」をさがし、「ピン」を取り除くことが幸福への第一歩。

— 2014 年 10 月 30 日 林 明夫記 —